

故郷を撮り続ける

アタゴ写真館

(出雲市平田町)

長島 綾



たくさんの方を教えて下さる優しい方でした。私たち取材班もついつい時間を忘れて聞き入ってしまいました。

アタゴ写真館開業

昭和五年開業のアタゴ写真館。それは前は貴金属のお店を経営していたそう、簪かんざしや指輪を作って売ったりしていたようです。貴金属店は田中久雄さんのおじいさんの代からされていましたがお父さんの保正さんの代で写真館に変えたそうです。

当時の平田には写真屋さんが多かったため、写真に関する知識が全くなかった保正さんは、松江の写真屋まで通い教えてもらいました。その際に交通手段として利用したのが船です。当時、田中さんの家の前の川からは松江に向かう船が出ていたそうで、長時間かけて二年間通いました。とても根気のいることだと思えます。しかし、その甲斐あって写真屋として店を開くことができました。アタゴ写真館という店名は田中さんの家から愛宕山あたごさんという山がよく見えたことから名づけたそうです。

アタゴ写真館の経営がうまく回転するようになったのは昭和十二、三年頃でした。日中戦争が始まり、戦争に行った人がいる家では家族の写真を撮って送るようになります。このような写真を慰問写真というのですが、保正さんは頼まれた家を回って、玄関先や庭先で慰問写真を撮ったそうです。



■田中貴金属店時代の店舗。

当時、平田にはアタゴ写真館以外に写真屋さんがあるにはあったのですが、ほとんどの家が保正さんに頼みました。もちろん、今のように個人でカメラを持っている時代ではありません。写真は写真屋さんに写してもらうのが普通だったのです。当時は自転車の後ろに撮影機材を積んで移動したそうで、家々を回るのは大変でした。そのため一日に二、三軒の家を回るのが精一杯で、保正さんは毎日のように平田の家々を回り慰問写真を撮ったそうです。重い撮影機材を抱えながらの移動で大変な作業でしたが、慰問写真がアタゴ写真館の経営を支えていました。

戦後は写真の撮影に使う材料が不足す

私が取材に向かった先は、出雲市平田町にあるアタゴ写真館の旧館。一九三〇年（昭和五年）に開業し、現在もまだ続いている、歴史ある写真屋さんです。写真館二代目の田中久雄さんにお話を伺いました。

取材前に田中さんに関する情報に少しでも触れておこうと、田中さんが自ら出版された写真集を見ることにしました。そこに写っていたのは昭和二十年代から三十年代頃の平田の風景とそこに暮らす人々です。全ての写真に必ず人が写っていて、どれも時代を感じさせる写真でした。また、家族写真を見ているかのような温かな気持ちにもなりました。

さてさてどんなお話が聞けるのでしょうか。わくわくした気持ちで取材当日を迎えました。田中久雄さんは昭和十年生まれの七十六歳。とてもお話し上手で、



■(上段)昔の七五三写真の撮影風景。スタジオは店舗2階にあった。(下段)昔のアタゴ写真館の外観。

るといふ災難に陥りました。写真を撮るためにはフィルムや現像液、印画紙、閃光電球といった材料が必要です。それをなんとか手に入れようと、保正さんは大阪へ買い出しに行きました。平田ではお米がたくさん作られていたので、お米を手に入れて大阪へ向かい、物々交換という形で写真材料を入手したそうです。その後、日本は戦争から立ち直り、仕事は一日に二、三件のペースで入るようになります。今度は慰問写真といったつらい写真ではなく、結婚式や七五三など、おめでたい写真が中心です。

父から息子へ

久雄さんが本格的に写真を撮り始めたのは高校卒業後ですが、趣味では中学三年生

の頃から撮っていました。そんな写真屋の息子ならではのエピソードがありますが、高校の頃は女子からとても人気があったそうです。何故ですかと聞くと、嬉しそうに答えられました。

当時カメラはとても高価なものであったため誰も持っていないでした。しかし写真屋の息子である久雄さんはいつでもカメラを自由に使うことができました。そんな久雄さんにたくさんの女子から写真を撮ってほしいと依頼があったそうです。よく同級生の男子に羨ましがられたとか。

昭和二十九年三月に平田高校を卒業した久雄さんは、保正さんからアタゴ写真館を継いでほしいと言われました。五人

きようだいの長男だった久雄さんは大学への進学を考えていましたが、この頃は長男が家業を継ぐのは当たり前前の時代。仕方なく大学進学をあきらめ、店を継ぐことを決意したそうです。それから久雄さんの写真家としての修業が始まります。

久雄さんは保正さんから「写真家として仕事をするまでには最低でも五年はかかる」「組立暗箱カメラが使えるようになつたら一人前だ」と教えられました。

それからというもの、毎日外へ出かけて撮影し、帰ったらすぐに現像の繰り返しだったそうです。当時のカメラというのは最近のデジタルカメラと違い、写真がうまく撮れているのか、その場で確認することができません。久雄さんも写真がちゃんと写っているのかという不安がなくなるまでには五年かかったそうです。

「移り行く平田を撮れ」

その後、段々と写真家としての腕を上げていった久雄さんに、保正さんは「移り行く平田を撮れ」と言われたそうです。



■下のカメラは久雄さんが保正さんから譲り受けた Canon4SD。



■組立暗箱カメラの説明をする田中久雄さん。



■(上段) 閃光電球。(中段) マグネシウム発光器。——いずれも昔のフラッシュ。(下段) 現在のアタゴ写真館。

と誇らしげに話してくださいました。

受け継がれる初代の教え

久雄さんに写真家として働いてきて思い出に残った出来事がありますかと質問してみました。すると昭和四十七年に起こった大水害のことを話されました。この洪水によって平田でもたくさんの方々浸水し被害に遭われたそうです。当時の写真を見ると被害の大きさがよくわかります。

そのとき、久雄さんは市役所の災害対策本部撮影班で水害に遭った平田を写真に撮って回る仕事を依頼されたそうです。移動するのに困難な場所もあったようですが、たくさんの方所を回り水害の様子を撮って回られました。保正さんが撮れと言っていた「社会に役立つ写真」とはこういうものだったのだと実感したそうです。

田中久雄さんの今

学校での講演会や新聞への写真投稿など、今でもたくさん活動をされている久雄さん。現在、一番熱心に取り組んでおられるのが平田で有名な一式飾を広める活動です。平田一式飾保存会の会長を務めておられます。インタビュー後も一式飾についてたくさんのお話を聞かせてくださいました。まだまだこれから



■ガラス乾板(フィルムが登場する以前の感光材料)の説明を受けているところ。

「四季などいつでも撮れる、しかし今の時代の平田は今しか撮れないものだ、血の通った写真を撮れ」——そう言われました。しかし、当時の久雄さんには何のことだか理解できませんでした。

そして、その言葉と一緒に保正さんは一台のカメラ(Canon4SD)を久雄さんに譲ります。当時の価格で六万八〇〇〇円、それはそれは高価なカメラでした。久雄さんはこのカメラを現在に至るまでずっと使い続けておられ、故障したことは一度もないそうです。

久雄さんはこのカメラで今までにたくさん写真を撮ってこられました。写真集の写真もほとんどがこのカメラで撮ったものです。そうして写真をたくさん撮っていきうちに段々と保正さんの言っていたことが理解できるようになってきました。「二度と撮れないものを撮ることが大切」——そう思えるようになってきたそうです。

久雄さんは私たちにその言葉の意味を

教えてくださいました。久雄さんが撮った写真の中に、郵便配達のおばさんがたぐさんのポスターが貼ってある壁をバックに撮影されているものがあります。「この写真の何がいいかって、この後ろのポスターが貼り付けてある壁がいいんですよ。こんな古いポスターが貼ってある壁なんて今ではないし、この郵便配達のおばさんも今はいない。まさに二度と撮れないものだ」と説明してくださいました。人と背景の両方があることで写真に物語性がでる。久雄さんが値打ちがあると考える写真とはそういうものだそうです。

久雄さんの撮る写真にはたぐさんの人を引き付ける力があります。久雄さんは自分が撮ってきた写真の展示会を平田で開いたことがあります。写真の中には、隣のおじさんだったり、今はもうない建物だったり昔を懐かしく思い出し、話に花が咲く写真がたぐさんあつたそうです。展示会にはたぐさんのお客さんが詰めかけ、見ていて楽しいと好評だった

いった様子で話をしておられる久雄さんの姿はとても輝いていました。現在、アタゴ写真館は久雄さんの息子さん(ながしま・あや)が継いでおられます。店は移転新築されましたが、今でも先代の意思が受け継がれています。今回の取材でアタゴ写真館という店の歩みを通して、田中久雄さんという一人の人間の生き方に触れることができました。写真にかける情熱や思いは半端じゃありません。島根にはこういった情熱的な職人さんがたくさんおられます。今回の取材は私にとって教えられることの多い、とても有意義なものとなりました。(ながしま・あや/英語文化系一年生)

カルチャーショック島根

福岡さと実
松永美澄

他県の人が島根県に対して持っているイメージを、島根県民は知っているように、実はよく知らないのではないだろうか。「こうじゃないの?」と思っても、実際は全く違っているのかも。

『のんびり雲』は、第一号(二〇〇七年)でも島根県のイメージについて取り上げた。あれから五年。今回は、静岡県民(松永)と島根県民(福岡)がタッグを組み、他県から来た人が島根県に対して持っているイメージを、島根県立大学短期大学部の学生・教員を対象に徹底調査、新たな視点から探ってみた。

これってないの!!

「島根にあつて地元にはないものは?」という質問をしたところ、多くの人の口から出たのが「あご野焼」。島根県民にとっては当たり前にあるもので、多くの家庭の食卓に出ているだろう。あご野焼と並んで多かった答えが「赤てん」だ。島根では、この二つが魚を使った特産物

として多くの県民に親しまれている。話を聞いていくと、県外にも、島根県民の知らない魚を使った特産物が各地にあるようだ。

北陸・近畿の日本海側だと「鯖のへしこ」。四国では「皮ちくわ」。愛媛では「鯛」を、徳島では「鱧」を竹に巻きつけて焼いたものである。私(松永)の地元・静岡の名物は「黒はんぺん」。はんぺんといえば、全国的に白いものが一般的だと思うが、静岡では黒色のはんぺんが主流である。友人に黒はんぺんの話をしたとき、「何それ」と言われ、話が通じず、とても寂しい気持ちになった。

「島根になくて地元にはあるものは?」という質問には、「コンビニの種類」が多く挙がった。短大の周りには、「ローソン」と「ファミリーマート」。そしてもう一つ島根にあるのは、知らなかった人も多かった「ポプラ」である。島根ではこの三つが主流であるが、県外から来た人にとっては、何か物足りない

ようである。私が面白いと思ったのは、「セブン・イレブン」は松江地区にはないのに、CMをやっていること。CMがどのような効果をもたらしているかわからないが、なんとも不思議である。

広島出身の人は「広島風のお好み焼き屋が少ない」と言っている。やはり、地元の食べ物に恋しいようだ。また、福岡出身の人は「とんこつラーメン以外のラーメン屋さんがあるのに驚いた」とか。その発言に驚きである。福岡県がとんこつラーメンで有名なのは知っていたが、まさかここまでだとは。醤油ラーメンや味噌ラーメンなどを食べたことがないのだろうか。

千葉県出身の先生からは「朝の通勤ラッシュがない」「自動改札がない」と言われた。自動改札がないのはよく言われることだが、通勤ラッシュについては「そういえば……」と気付かされた。通勤・通学時間になると電車はぎゅうぎゅうになるが、都会ほどではない。それも、

島根ではほとんどの列車が二両しかないのが原因であつて、実際は言うほど混んでいるわけではない。この間、面白く思っていたのは、県外からの人だと思うが、島根にはドアの横にあるボタンを押さないとドアが開かない列車があることを知らなかったらしく、「どうやってドア開くんですか?」と聞かれ、島根のアナログさを思い知らされた。

香川県出身の人は「サル、シカ、タヌキがない」と答えてくれた。しかし、ここで声を大にして言いたい。「島根にもいます!!」と。サルが出たという話あまり聞いたことがないが、シカやタヌキは山のほうに行くと絶対いる。動物注意の標識もあるくらいだ。松江は建物が多いのでそうそう見かけることはないが、少し車を走らせればちゃんとしているので、ご安心を。タヌキは、我が短大にも





Satomi

出没するという噂を聞いたことがある。

言葉の違い

地元を出てみるとわかるものがある。それは方言である。自分では今まで当たり前のように使っていた言葉が、他の県に行くと「えっ、何それ？」と聞き返されてしまう。その時のショックといったら、とんでもないものである。島根の皆さんは気づいているだろうか？ ここで県外から来た人が驚いた「島根の方言」を紹介したいと思う。

一番多くあがったのが、語尾に「〜だ」が「〜だに」「〜しちよる」とつけることである。なんとなく「このようなことが言いたいのかな」とわかるが、初めて聞いたときは、本当に驚くようだ。語尾に「〜だが」とつくと、方言だと気づかずに、接続詞の「しかし」ととらえ、相手の話がまだ続いていると勘違いする人

もいるようだ。「あげだが」「そげだが」も話の内容を理解していないと、どのような意味をもっているか、わからないものである。

島根の方言の中でも一番驚かれるのは、「たばこする」の「たばこ」の意味ではないだろうか。県外から来た人にとって「たばこ」は、未成年が手を出してはいけない、体に悪いものの「煙草」を想像すると思う。しかし島根の中の「たばこ」は「休む・休憩する」という意味で使われている。実際に使っているところを聞いたことのない人でも、「島根の方言といえは？」と聞くと、「たばこする」と返ってくる。現代の会話の中ではあまり使われないが、若者も知っているこの方言は島根を代表する方言で、これからも大事にしていかなければならない一つの文化ではないだろうか。

また、方言とは少し違うかもしれないが、島根県民がよく使うのが「腸感冒」。この言葉を標準語だと思っている人も少なくないだろう。しかし、県外の人に「腸感冒」と言っても通じない。全国的には「感染性胃腸炎」というのが正しいらしい。「腸感冒」というのは山陰地方だけの言葉だとか。病気の名前にも違いがあったとは驚きである。

島根の中でも方言が違う。松江よりも出雲のほうが方言が強い。そのため、時々「その方言何？」や「イントネーションが違う」「方言がうつった」などの会話を聞く。それは島根県内に限らず、県外

の人にもありうることである。島根の方言がうつることがあるだろうし、地元の方言が出ることもあるだろう。

島根でこんなCMがある。ある地元企業のCMの中で、「方言で働くっていいがーって」と一言でてくる。その言葉のとおり、方言はとても良いものである。その地域の文化の一つであり、故郷を示すものだ。だから、これからも多くの人が使い、未来にもつながってほしいものである。ぜひ、島根県民の人にお願したい。県外から来た人の方言をからかわないでほしい。自分がそこで育ってきたという証拠が方言として表れているのだ。もっともつと普段から使っているのを忘れないでいてほしい。どうか県外からきた人を暖かく見守ってほしい。

外から見た「島根人」

「島根県民の印象は？」という問いに、多くの人が「穏やか」「優しい」「のんびりしている」と答えた。やっぱり……。島根県民が、全体的にゆったりしていると感じるのは、皆同じのようだ。例えばの話、外を歩いていても、早歩きでどこからどう見ても時間に追われていません、なんて人はそうそう見かけない。みんな、自分のペースでのんびりと、だ。逆にそうでないとかえって目立ってしまう。以前、何を思ったのか、私は自分のいつものペースの倍くらいのス



Satomi

PEEDで街中を歩いてみた。そうしたら、周りの人に「この人、何をこんな急いでいるんだろう」という顔をされたことがある。思い返してみれば、なかなか恥ずかしいことをしたものだ。島根には島根の時間の流れというものがあり、あの時の私は、その流れに反していたのだろう。県外から来られた先生方にも聞いてみたところ、「うんちくを披露したがる」という面白い答えが返ってきた。言われてみれば……。うん、納得である。私の身近にもそういう人いる、と心の中で大きく頷いた。あまり意識していなかったが、これも島根特有なのか。なんとも複雑な気持ちである。会話が続きという観点から見れば、話し上手、とても言えるのかもしれないが、あまり自慢できることのように思えないのは私だけだろうか。

また、「消極的に見えて抑圧されたプ
ライドがある」や「外から来た人間に敵
しい」という答えも。こうやって聞くと、
島根県民、なかなか怖いではないか。「消
極的に見えて……」というの的を射て
いるように思う。実際、私も言われてみ
ればそんな気が……。あまり「自分が、
自分が」という風にはならないが、心の
中で「こうすればいいのになあ」と思う
ことも。しかし、「外から来た人間に敵
しい」というのはどうだろう？ 自分た
ちはそう感じないだけで、県外の人から
そう見えてしまうのかもしれない。相手
に対する思いやり、なかなか難しいもの
である。

島根の面白い食べ物

出雲そばとして有名な「割子そば」の
声が多いなか、「ぼてぼて茶」なんて渋
いものも。これには私も驚きである。ま



Satomi

た、「法事パン」と答えてくれた人もいた。
法事パンはその家々によつて種類は様々
だが、私の家の法事パンは、花の絵が描
いてあり、中に餡ここの入ったカラフルな
蒸しパン。私は祖父の家で法事の時によ
く食べていたが、これも島根特有のもの
なのか。他県ではどのように法事が行わ
れているか分からないが、法事パンがな
いというのは不思議な感じである。

その他にも先ほど話に上がった「あご
野焼」や「赤てん」、また「津田かぶ漬け」
など、皆さん思った以上に島根の食べ物
をご存じのようだ。ある先生の話では、
「あご野焼」はお土産に持っていくと好
評なのだとか。他県の人に島根のものが
喜ばれているというのを聞くと、なんだ
か嬉しい気持ちになる。島根県民の食卓
に当たり前に並んでいるものは他の県で
も普通にあるように思ったりしてしまっ
たが、こうやって話を聞くと「島根にし
かないのだ」と改めて実感させられる。

これは何て読む？

島根には面白い読み方の地名がたくさん
ある。例えば「大田」。島根県民なら
誰でも読めると思うが、県外から来た人
たちは「おおた」と呼んでしまうとか。
島根県は濁点の位置が独特らしく、これ
以外にも、「上乃木」の「あげ」の部分
が最初読めなかった、という話をよく聞
いた。また逆に、「木次」は普通に読め
ば「きつき」となってしまうところだが、
濁点がとれて「きすき」と読む。なんと



Satomi

もややこしい。小さな違いだが、ちゃ
んと分かっていないと、相手にうまく伝
わらなかったりするのだから大変。

「雑賀町」や「母衣町」が分からなかつ
たという声も、少数であるが耳にした。
松江市出身の友人も、「最近読み方を知
た」なんて恐ろしいことを言っていたの
だから、県外の人からわからないのも当然
だろう。なかには「出雲郷」や「十六島」
なんて答えてくれた人もいたが、私とし
てはこの地名を知っていたことに驚い
た。なかなかインパクトのある名前だか
ら、記憶に残ったのだろう、と勝手に解
釈。ちなみに、先ほどの地名、皆さんは
読めただろうか？ 答えは「出雲郷」
あだかえ、「十六島」
うっふるい。も
はや当て字でもなんでもない。これを読
めた人に、私は素直に「すごい！」と言

いたいくらいだ。

こうやってたくさんの人から話を聞
いていると、「島根の地名って読みにく
い？」と感じてしまう。島根県民の私
も「十六島」は読めなかった。まあ、た
だ単に私がその地名自体を知らなかつた
というだけなのだが。だが島根には、そ
んなに難しい漢字ではないのに、読み方
が難しい地名が多いように思える（よそ
の県も同じようなものかなとも思うが
……）。「その漢字にそんな読み方あ
ったっけ？」と思わされることも。調べ
てみたら、まだまだ知らない地名が出て
くるかもしれない。島根の地名を調べ
るのもなかなか面白いかも？

今年県外に行ってしまった友人が、長
期休暇で島根に帰省していたときに「島
根のこの何もないところが妙に落ち着
く」と話していた。島根県民が外に行く
と、今までとは違い、たくさんモノに
溢れた世界に疲れてしまうのだとか。友
人も、県外に出てカルチャーショックを
受けてきたのだろう。私がこの記事を書
くにあたって、多くの人から話を聞き、
私自身もショックを受けた部分もある。
しかし、話を聞くよりも自分の目で見て、
体験するほうがショックは大きいはず
だ。私もこれから、友人のように自分の
目で見て、感じて多くのカルチャーショ
ックを体験したいと思う。

(ふくま・さとみ／文化資源学系一年生)
(まつなが・みすみ／文化資源学系一年生)



和田翠雲堂

(松江市)

商店探訪

7

宮崎史歩

硯紙墨」がすべてそろうお店です。

◆町名「芋町」のお話

和田翠雲堂は松江市芋町芋にあります。お店に入り初めに話してくださいました。芋町という名前についてです。「芋」という漢字は麻の別名だそうです。「ほら、芋殻ってあるでしょ。あの芋殻の芋よ」と言われるのですが、何のことかさっぱりわかりませんでした。

「お盆にお墓まいりした時に花立てに



大きいです。さらに大きいものもあるのですが、この大きさで一枚なんと一万二千円もするのです。

◆筆、筆、筆……

お店に入ります目に入ったのはたくさん吊された筆。大きいものから通常サイズのもの、毛の種類も固いものやふわふわしているものと、ほんとにたくさんありました。三百種は超えるそうです。

私が一番目に付いた大きな筆を珍し

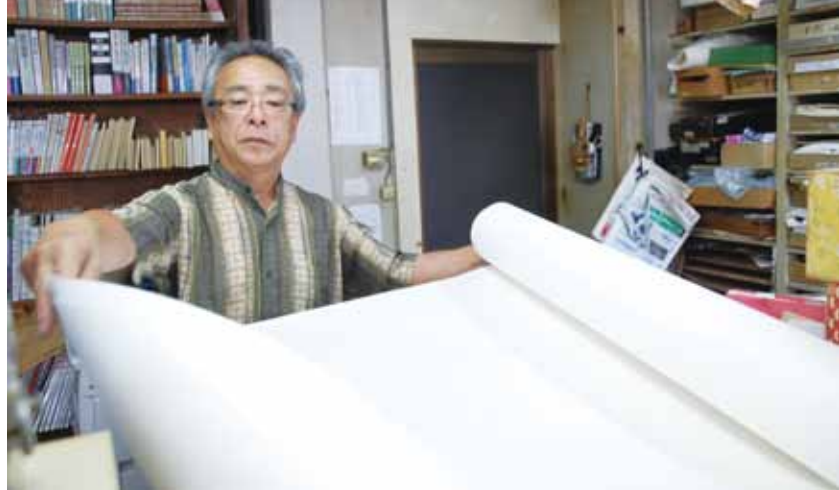
『のんびり雲』の第一号に掲載されていた、たくさんの筆と鮮やかな岩絵の具の写真に魅了され、私はここ「和田翠雲堂」を取材することに決めました。

お店の入り口を開けると看板猫のポンちゃんちゃんと店主の和田史朗さん、奥さんの早苗さんが笑顔で迎えてくださいました。

お店には大量の筆、紙、墨、硯、そして岩絵の具がズラッと並べられていました。翠雲堂は日本画や書道に必要な筆

分を取り除いた芋殻というもので、これをお墓に立てるのだそうです。偶然お店に入ってしまった男性に尋ねると「この辺では普通のことだよ」と教えてくださいました。お店に入って早々カルチャーショックを受けたのでした。

原料の話をしたからと、ご主人がお店の奥から持ってきてくださったのは巨大な麻紙。麻紙は日本画を描くための紙だそうです。紙の大きさは四六判といって一二センチ×一八二センチとほんとに



■(上段右)で主人が奥から持ってきて広げて見せてくださったのは、大きな4・6判の麻紙。(上段左)吊された、たくさんの筆。太さも形もいろいろ。(下段右)藁でできた筆。(下段中)竹でできた筆。(下段左)こんな変わった形の筆も。

◆想像を超える鮮やかさと奥深さ
店の左奥に見えるのは色鮮やかに並べ

がって触っていると、奥さんが「それは火食い鳥の羽を使っているのよ。こっちは竹で、藁でできているのもあるよ」と次々と珍しい筆を出してくださいました。竹は一本の枝からできていて、毛先がとても固くなっており、藁でできた筆は持ち手が編んで作られていました。こんな変わった筆を使う人もいるのか、と驚いていると「多くの筆記用具がある中で太細を一本で調節できるのは筆だけだ」と教えてくださいました。力の入れ方や毛の素材の違いによって作品の雰囲気が変わってくるから、お客様の要望に応えるためにいろんな筆をそろえているのだそうです。

松江は筆記用具が筆と墨しかなかった時代に、藩に仕える筆職人が多くいて、松江筆というのが有名だったそうです。翠雲堂では昭和三十年代までは自分たちの経営していた工場で作っていました。



■(上段)店の外観。(下段)「いらっしやいませ」——ご主人と奥さん。



■岩絵の具は、昔ながらの秤を使って10グラム単位で量り売りします。ご主人が実際にやって見せてくださいました。

天然のものは藍銅鉱、孔雀石という天然の石や珊瑚、牡蠣などを削って作られています。藍銅鉱は最も高価で美しいとされる群青に、孔雀石は緑色、珊瑚は薄くかわいらしい桃色に、牡蠣は日本画の基本である白になります。

人工の絵の具は十グラム三百円程度ですが、同じ色でも天然になると十グラム三千円と、およそ十倍の価格の差があります。天然のものの方は高値な分、発色

天然と人工のものがあられられたピン。私が取材を決める決定打となった写真の風景です。写真よりも、想像していたよりも、すごい数がならんでいて、つい「おお」と感嘆の声が漏れてしまうほどです。これが日本画に使われる岩絵の具というものです。



■箱段。初めて見ました。

の良さや色の温かさなどで違いが出てくるそうです。

また、色の中でも赤や青、緑などの濃い色のほうが高値なのだとか。そのため「作品に使われている色を見るだけで、材料費がどのくらいかかっているのかわかる」とのこと。

そして、ひとつの色にはそれぞれ五〜一三の番号と白という十の名前があります。数の小さい方が粒子が大きく粗いため鮮やかで、数が大きくなると粒子が細かくなり淡い色になっていきます。そして白がその色の中で最も粒子が細かく淡い色をしているのです。単純に赤といっても、赤には多くの名前の赤があり、そのひとつひとつの赤が十種類ずつあるのです。棚が鮮やかになるのもうなずけます。

翠雲堂では昔からの秤を用いて十グラム単位での量り売りをしています。この売り方を現在でも行っているのは山陰地方では翠雲堂だけだそうです。しかし、最近ではカルチャースクールなどで生徒

ら、多くのピンを棚に並べているのだそうです。

この岩絵の具を紙につけるための糊の役割をしているのが「膠」です。日本画を「膠彩画」と呼ぶほど膠は重要らしく、ご主人がとても熱く語ってくださいました（すべてにおいて全力でしたが、ここは特に！）。

膠の主な成分は牛などの骨や皮を煮て取り出したコラーゲンです。膠の元祖は奈良のおばあちゃんが作っていた三千年本膠という棒状の物。これを切って煮て溶かしてこしたものを岩絵の具と混ぜて紙に描いていきます。この膠は天然物なので一日放置していたら腐ってしまします。また、おばあちゃんが廃業してしまつたこともあり、現在は防腐剤の入った粒状のものや瓶にあらかじめ液体化されて入っているものが主流だそうです。

◆二階に広がる書の世界

次に、急な階段を上がり二階へ向かいます。この階段は箱段といわれるもので

が自分で気軽に選べて使いやすいようにと、少量に小分けされたミニボトルも販売しています。また、インターネットでの販売もされていますが、実際にお店に足を運んでもらって自分の目で直接見て選んでもらいたいか



■（左）硯がずらりと並んだ二階の和室。（右）筆の形をした昔の看板。

した。段が引き出しになっているそうです。「からくり屋敷みたいでおもしろいでしょ」と話してくださいました。階段から二階に頭を出し視界に入ったものは山積みになった紙です。紙もまた多くの種類を出して見せていただきました。無地のものや模様のあるもの、違う模様の紙を継いで作られているものなど。金箔や銀箔が漉き込まれている紙も



■（右上）桃の形をした硯。（右下）桃の種の形をした硯。（左）陶暖碗。

ありました。継いで作られている紙は一枚千二百円など非常に高価です。どのような人が使うのかと尋ねると「これは仮名の人が使うよ」という答え。仮名の人はどんな人かというところ、書道の中でも漢字を書く人ではなく、古典の歌を書いている人」だそうです。仮名と漢字とは使う墨が違うから紙もその墨に適した紙を使用するのです。



■ご主人・奥さんといっしょに店先で記念写真。

たくさん種類の種類があるのは、作品によつてそれに合う背景を選ぶためです。しかし、仮名の人口は書道をする人の中で一〇パーセント程度だそうです。大量の紙を仕入れても出て行くペーパースはとてもゆっくりです。それでもやはりお客様にニーズに応えるために多くの種類を揃えています。

奥の部屋に進むと畳の上にならずりと硯が並べられていました。硯は多くが中国で手に入れてきたものだそうです。硯といえは多くの方は四角くて海と陸があるものを思い浮かべると思います。しかしご主人が出してきてくれたものは、桃の

形のもの、桃の種の形をしているもの、獅子が振り向いた格好のもの、などなど。桃は不老長寿を表しているらしく、中国の硯は格言を象徴した形をしたものが多くあるそうです。

たくさん見せていただいた硯の中で私が一番興味を持ったのは、陶暖硯という硯です。高さがあり下部に穴が開いていました。「どうやって使うと思います？」と尋ねられ、「なんの穴なんだろうか」としばらく悩んだのですが全くわかりませんでした。この硯は中国の東北部で出土したものだそうです。寒い地域では水を入れ、墨を摺るとだんだんと凍ってしまいます。そのため下の穴から炭火で温めながら使うのだそうです。昔の人の知恵が詰まった硯です。

◆お店も趣味も二人で仲良く

お店の名前「翠雲堂」は、初代主人の「翠雲」という号から来ているそうです。号というのは書道家の芸名のようなもので、二代目は悠成、三代目が大潜で、現代のご主人である四代目が朗雲です。店主は今まで代々書道家で、作品は県立



■(上段)違う模様の紙を継いで作られた紙。(下段)お店の看板猫のポンちゃん。

美術館に展示されていたり、一畑ホテルに飾られたりしているそうです。また、二代目の悠成さんは、幼いころに日本画の巨匠と呼ばれる横山大観から絵の才能を認められ、養子に出来ないかという誘いもあったそうです。

「このお店は代々主人が趣味人で妻が経営を担当してるんだけど、私たちはどっちも趣味しちゃうてるのよ」と笑顔で話す奥さん。ご主人は農家の出身で、お芝居がしたくて東京へ行き、劇団を立ち上げていました。そして、和田家の娘さん(奥さん)はその劇団の劇団員だったので。

三十代のころに松江に戻ってきて翠雲堂を継ぐことが決まってから書の修業に励んだそうです。現在は、書道講座を開き生徒さんたちに指導する傍ら、県民手作りミュージカル『愛と地球と競売人』の演出を務めていらっしやいます。「よ

かったら参加してみて」と、『ペリプ・イン・ミー』というミュージカルのキャスト募集のオーディション申込用紙をたくさんいただきました。

また、最近では額の貸し出しやお客様の持つてこられた作品を掛け軸にした額に入れたりする表装の取り次ぎもしているらしいです。自分で作った作品を部屋に飾りたいと注文する方が多くいらっしやるそうです。せっかくの作品は押し入れにしまってしまうより、みんなに見てもらいたいですよね。

最近では書道や日本画を習う人が少なくなってきたそうです。筆ペン講座などは子育てを終えた女性などから人気があるそうですが、せっかく始めた人も自分の師が亡くなったたりすると、それをきっかけにやめてしまう人が多いとのこと。少しでも多くの人に書に触れてほしいと、少しさみしそうに話してくださいました。

私は、日本画のことも書道のことも何もわからない状態でこの取材をさせていただきました。そんな私にご主人も奥さんもとても熱心に話をしてください、私に知らない世界の中にはこんなに奥が深いものもあるのかと感心することばかりでした。そして、猫のポンちゃん、かわいかったです。おばあちゃんの家にいるようなとても懐かしい気持ちになれるお店でした。興味のある人はぜひ足を運んでみてください。

(みやざき・しほ／日本語文化系一年生)

松江石碑巡り

熊倉 楓 (くまくら・かえで / 文化資源学系1年生)



③澤野含齋翁碑 (床几山)

ほかの石碑より苔が目立っていた。藩校修道館教師。松江市雑賀の足軽の家に生まれた。雑賀小学校初代校長となり、後に培塾を開いた。



私は幼いころから石碑や歴史的建造物を見るのが好きだった。そこで今回のテーマを松江の石碑にしようと考えたのだが、私は京都の舞鶴出身。松江の石碑については何も知らないの、元松江郷土館・館長の安部登先生にレクチャーをお願いした。安部先生から松江にある石碑のリストをいただいたのだが、そのリストにはなんと146個もの石碑が記載されていた。タフな私でもさすがにすべては回れないので、その中から厳選して巡ることにした。



④老雨雨森君碑 (床几山)

丸みを帯びていて柔らかい印象。漢文のため解読はできなかった。幕末の松江藩儒として活躍し、松江・平田で私塾を開いた。



②山内曲川句碑 (床几山)

明治39年建立とある。古いからなのか、文字が擦れていて読むことができなかった。色あせているようにも思えた。山内曲川は幕末から明治期にかけての俳人であり、松江の骨董商だった。山陰の芭蕉とも称された。



①森本文斎君碑 (床几山)

床几山にあるほかの石碑にも共通して言えるが、とにかく大きい。石碑はひっそりたたずんでいるものだと思っていたが、ここでいきなり覆される。森本文斎は明治初期の産婦人科医である。私財を投じて山陰初の産婆と看護師の養成学校を開設した。

床几山で一苦労

「床几山」は、松江に住んでいる人ならみんな一度は耳にしたことがあるだろう。床几山は石碑の集まる、この取材にうってつけの場所だ。この日の取材もまずは床几山からスタートすることにした。開始時間は朝10時ごろ。まずは床几山を目指すことになったのだが、なかなか見つからない。同じような住宅街を何度も回ること1時間半、やはり見つからない。最終的には同行者の澤松さんがスマートフォンで調べてくれて見つかった。前途多難な取材になった。



⑧小林如泥生家跡 (灘町)

民家の前に建立されており、気をつけて見ないと見逃してしまいそうだった。江戸時代後期に活躍した木彫・木工家。不昧公から大変気に入られた。この石碑は如泥の生家跡の記念碑。



⑦培塾跡 (幸町)

ほかの石碑に比べると黒くて墓石のような印象。駐車場の隅に建立されており見つけるのに一苦労した。澤野修輔(澤野含齋)が開いた私塾。ここから若槻礼次郎や岸清一など多くの人材が育った。

⑤佐々木文蔚君碑 (床几山)

角ばっており床几山にあるものの中では一番大きい。佐々木文蔚は出身こそ弘前だが、島根県医学学校長として赴任し、島根県の医学の基礎を築いた海軍医である。



⑥床几山碑

床几山に建立されているほかの石碑と違い、文字がはっきりと残っていた。大きな岩の上に乗っていた。ほかのものとは格の違いがあるのだろうか。堀尾吉晴・忠氏親子による城地選定の地として開府三百年を機に建立される。





⑩深田技師殉難記念碑（松江大橋南詰）
デザインがほかの石碑と違い近代的な印象を与える。現在の松江大橋が完成する際に工事で亡くなった深田清技師をしのんだ記念碑。（昭和の原助柱）

⑨紫雲塾碑（雑賀町）

なぜか、「紫雲塾碑」の下には「雑賀幼稚園」、隣には「三丁目の六丁目」と書かれていた。雑賀町には「〇丁目の〇丁目」というビックリ地名を記した石柱がいくつもある。たまたま出会った方に聞いたら、東西、南北それぞれの起点となる道路から何本目の通りかを表示しているそうだ。紫雲塾とは高井忠次郎が嘉永二年に開き読書・習字を教えた私塾。



⑪福田平治翁之碑（北田町集会所「愛隣会館」前）
大きくて目立つのになぜか、なかなか見つけることができなかつた。隣にある愛隣会館に気を取られていたからだろうか。福田平治は松江にて孤児院や老人ホームなど多くの社会福祉に貢献した。「山陰社会事業の父」と言われている。



⑭天隆公寿蔵碑（月照寺）

噂には聞いていたがとにかく大きい。今回、回ったものの中で一番大きかった。亀の頭にはお賽銭とみられる小銭がのついていた。不昧公が父である天隆公の長寿を祈願して作らせたもの。夜になると市内を徘徊するというお話でも有名である。



⑫小泉八雲宿舎跡（末次本町・大橋館前）

大橋館の入り口に建立されているため見つけやすかつた。ほかの石碑と違い、色が黄土色で建物の色に合っていた。小泉八雲が宿泊した富田旅館があった跡地。

⑪源助柱記念碑（松江大橋南詰）

この石碑は深田技師殉難記念碑と一緒に松江大橋の南詰にあり、わかりやすい位置にあつた。八雲ゆかりの地の看板も一緒にあつたのでさらに見つけやすい。江戸初期に初代松江大橋をかけた際、人柱になつたといわれる源助をしのんだ記念碑。

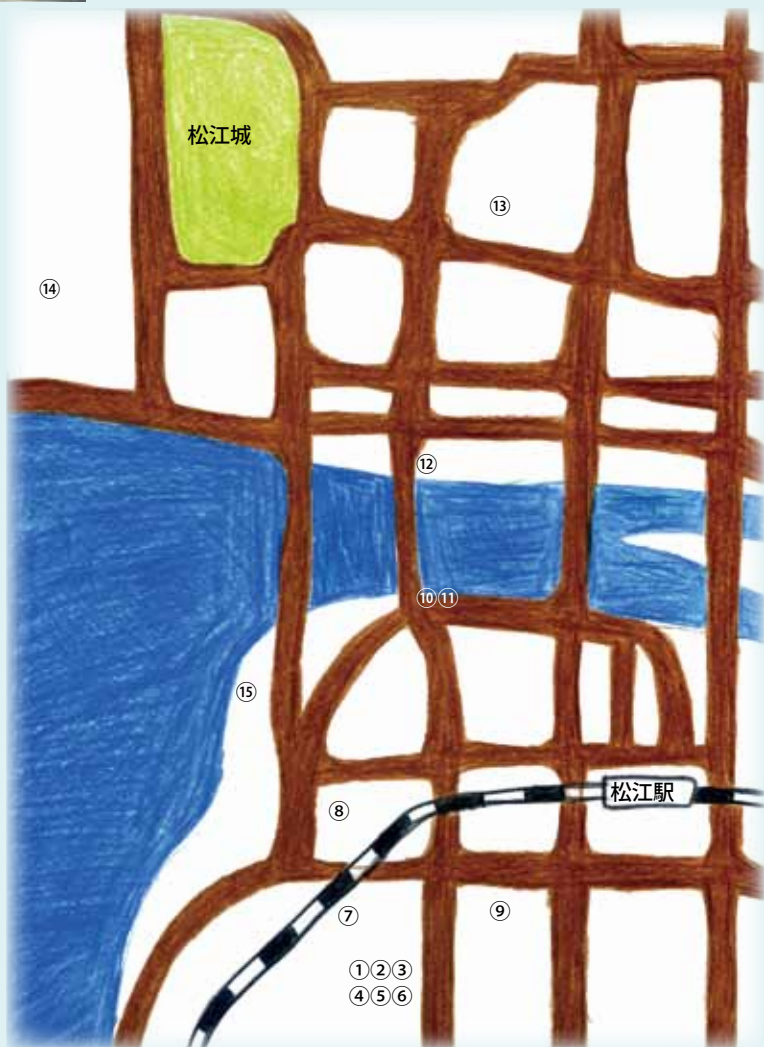


⑮玄丹かよ胸像

こちらは胸像だが白瀧公園の中に立っており、遠くからでもすぐに見つけることができました。玄丹かよは松江藩士の娘として生まれ、目を病んだ父を助けて芸妓になつた。鎮撫使一行が訪れた際に接待し、藩を難局から救つた。



最初の床几山から始まり、最後の玄丹かよの胸像まで約半日かけて石碑を回ってみたがなかなか大変だつた。だが、なかなか見つかからないからこそ見つけた時には達成感がこみ上げてくる。今回紹介した松江の石碑はまだまだほんの一部に過ぎない。皆さんもぜひ石碑巡りを体験してみたいかだろうか。石碑巡りで注意することは、しっかりと下調べをしておくこと、探し回ることを覚悟しておくこと。あとは車よりも徒歩や自転車のほうがおすすめです。これは駐車スペースが確保できないためである。



島根半島をゆく

——守り続けたい美しい自然と文化——

大西 葵



島根県の北東に位置し、豊かな自然と文化を有する島根半島。今回は島根半島の海岸線——塩津から鷺浦までが旅の舞台だ。

八月十一日、午前九時、松江から国道431号線を西に向かい、平田の街に入るちよつと手前で北に折れ、久多美方面に向かう。やがて野石谷という所にさしかかるが、ここは三年前に短大にいた先輩が車を運転していて鹿とぶつかったという所だ。今にも鹿が出てきそうな山中にどんどん入っていく。

最初のスポットは唯浦隧道。トンネルは車がすれ違えないほどの狭さ。入り口で記念すべき最初の写真を撮った。

トンネルの中を歩くことにした。背中から風がゴーツと吹いてくる。ここを抜けると眼下に日本海が拡がり、目指す塩津小学校はもうすぐだ。

鹿入るべからず

出発から約一時間後、塩津小学校に到着した。塩津小学校は映画「白い船」の舞台として有名で、全校十五人という小さな小学校だ。校門に着いてみるとネットが張ってあった。小学校にネットがあることに驚いていると、「鹿侵入防止ネット」の文字が目飛び込んできた。

ちよつと不安だったが、ネットをくぐって中に入ることになった。校舎をのぞいてみると、幸



運なことに夏休みなのに先生が一人出た。四月にこの小学校に赴任して来られたばかりの高尾洋先生だ。突然の訪問にもかかわらず、校舎の中を見学させてくださった。中に入ってみると廊下の端から向こうの端がすぐそこに見える。歩いてみると三十六歩しかない。

体育館から二階上がる階段には昔の面影がそのまま残っていた。それぞれの段に数字が書いてあって、階段を上りながら数を覚えられるというわけだ。二階には「白い船」で登場した教室がある。子どもたちが船を見るために使った双眼鏡も置いてあった。船は数年前に航路を変えてしまい、現在は通っていないそうだが、私も映画の子どもたちのように双眼鏡をのぞいてみた。

校門の鹿用ネットのことを尋ねてみた。この地区にはたくさん鹿がいて、朝、子どもたちが登校してくるときに鹿

■(上段) 塩津小学校の2階の教室。先生の机が1つと生徒の机が4つ。(下段) 玄関で高尾先生と。



が畏にかかっていることもあるのか。子どもたちが「鹿が血だらけだったよ」と報告してくれることもあるそうだ。子どもたちにとっては日常のことで、もう慣れっこである。

高尾先生は、少ない生徒数で、しかも一日中子どもたちと一緒にいるので、とても仲良くなれると楽しそうに話しておられた。少人数のため授業中も一人ひとりの子どもによく目が届くし、給食も生



徒と先生がいつしよに食べるので、体調が悪かったり機嫌が悪かったりするとすぐにわかるそうだ。先生に自分のちよつとした変化を気づいてもらえたら、これほどうれしいことはない。反対に大変なことを伺うと、小さい学校なのでどんなことでもサボれなくなつたとおっしゃっていた。掃除をサボっていたら子どもにも見つかって注意されてしまうこともあるという。

■ (上段) ピントの合わせ方がわからず、なにも見えなかった。(下段右) この階段があれば算数が得意になったかもしれない。(下段左) 高尾先生にインタビュー。

子ども神楽

塩津小学校は子ども神楽でも有名だ。元々は川谷秀さんという神楽の好きな方が始められ、子どもたちに教えるようになった。今では全校生徒が放課後や土曜日に集まって練習している。子どもたちは神楽が大好きだ。いつもはのんびりしている子どもでも神楽の舞台に立つとピシッと気合を入れて演じるという。神楽のセリフは難しい言葉だが子どもたちはすぐ覚えてしまうそうだ。

神楽は子どもたちにとっていい経験になるし、将来地元を離れることがあつたとしても、帰ってきたときに思い出話として盛り上がってくれたらいいと高尾先生はおっしゃっていた。塩津小学校の生徒数が一番多かったのは昭和三十五年の百二十七人。逆に一番少なかったのは平成二十一年の九人だ。「生徒の人数はやはり増えてほしいですか」と尋ねると、「小さいからいいこともいっぱいある」とおっしゃっていた。

自然の力 風力

塩津小学校に別れを告げて十六島^{うっがるい}に向かった。海岸から急な坂を上り、山道を上つたり下つたりするうちに十六島風車公園に着く。見上げると風車がすぐ真上にあつて、ビュンビュンというプロペラの回る音が聞こえてくる。風車公園からは十四台もの風車が見えた。

この日は十六島鼻灯台にも行きたかつたが、山道でハチやアブに刺されたり迷

子になつたりしたら危険ということで断念した。

韓竈神社

島根半島の旅はまだまだ続く。ちよつどお腹がすいてきたころ、午前中の最後のポイントとして唐川町にある韓竈^{かながま}神社を訪れた。インターネットでこの神社のことを調べていて、「当社は高所恐怖症及び極度の肥満の方は無理だと思つ」といつた書き込みを見つけたため、一体どんなすごい所なのだろうと期待で胸がいつぱいだ。韓竈神社は素盞鳴命^{すさのおのみこと}を祭っている神社だ。韓竈の「カマ」は溶鉱炉を意味するものとも言われている。

駐車場からしばらく歩くと杉林に入る。木が規則正しく並んでいて自然の美しさを感じさせる。なだらかで比較的楽な道だ。そしてついに難関に辿り着いた。鳥居があり、その向こうは傾斜三十度もあるように見える石段がずっと上まで続いている。私たちは気合いを入れて上り始めた。石には苔が生えていて滑りやすく、ロープが張つてあるが危険だ。





①急な石段。息が上がる。②この岩の割れ目を通らないと韓竈神社には辿り着けない。横にならないと通れない狭さ。③韓竈神社。④岩船。

石段をかなり上ったところで、大きな岩が私たちの目の前に立ちほだかった。どうやら岩の割れ目が道になっているようだ。割れ目はスリムな私(?)でも横向きにならないと通れないほど狭い。なんとか岩を抜け、見上げるとすぐそこに韓竈神社が。

私たちがお参りをしていると男女の二人連れが上ってきた。その方たちは東京から来たという。男の人はもともと島根の山奥に住んでいたそうだ。東京で古事記の語り部をやるうと思ひ、神話のふるさと島根を実際に訪れてみたという。

韓竈神社から急な石段を引き返して鳥居のところまで戻っていくと、すぐ近く

に「岩船」を見つけた。これは素盞鳴命がわが国に「植林法」や「鉄器文化」を伝える際に乗ったとされる船だ。苔に覆われているが確かに下の方は船首部分のようにも見える。

韓竈神社を後にして駐車場に戻ると、疲れで足ががくがくし、おまけに蚊に四ヶ所も刺されていた。アブも出るので韓竈神社に行かれる方は虫よけスプレーを携行するか長袖長ズボンで行かれることをおすすめする。

腹が減っては取材はできぬ

お腹がすいたので訪問予定地を少し飛ばし、昼食はここで決めていた「カフェ

うさぎ」に向かうことにした。もうお昼の時間はだいぶ過ぎていた。日本海を眺めながら大社方面へ車を走らせる。カフェうさぎは出雲市大社町鷺浦にある。一九二一年(明治四十四年)に建てられた旧鷺鷺郵便局を改装してカフェにしたものだ。窓は昔の窓ガラスのように向こうの景色が少し歪んで見える。

店内には他にもお客さんがおられ、地元の方ももちろん神奈川県から来たという方も。お店のすぐ近くを流れる八千代川から心地よい風が吹いてくる。私たちが注文した「うさぎ定食」は、藻塩のおにぎり、今がシーズンというアラメを使った煮物、アラメのサラダ、それにワカメのお味噌汁、それに自家製のお漬物が付いていた。どれもこの鷺鷺地区でとれたものだ。ワカメは新鮮で歯ごたえがしっかりしている。私はアラメを食べるのは初めてだったが、とてもおいしかった。藻塩のおにぎりは優しい味だ。

忙しそうにしておられた飯島正子さんから少し時間をいただいております。このお店は、松江市から移り住んだ立花加代子さんが、古民家の好きな方だったことから始まったそうだ。



■八千代川の対岸から撮ったカフェうさぎ。

立花さんは旧鷺鷺郵便局の建物や場所が気に入って、ここをお年寄りがおしゃべりできる場所にしたと思った。そして、その考えに飯島さんが賛同してカフェうさぎの計画がスタートした。そして、今年の六月に念願のオープンを果たした。

「今後の目標は何かありますか」と尋



■(上段) 鱈淵小学校猪目分校。(下段) 猪目洞窟。

ねると、「地元の人に芸術に触れてもらいたい」とおっしゃっていた。その言葉通り、これまでも写真展やサククス演奏会などを催し、私たちが訪れたときは本学保育学科の福井一尊先生の作品(テラコッタ)が展示されていた。

実は飯島さんは滋賀県からUターンした。次の目的地は鵜鷺小学校。ここは校門にも塩津小学校と同じく鹿侵入防止用のネットが張ってあった。持ち上げてみると猫が一匹やっと通れるほどの隙間しかなかった。残念ながら校舎は高い所にあるので見えない。ここも木造建築で生徒数も少ないと聞いていた。

次は猪目洞窟に向かった。古代にはこの洞窟はあゝの世につながると信じられていた。『出雲国風土記』には、「夢の中でこの洞窟に行くのを見たならば、必ず死んでしまう」と記されていたそうで、私は夢に出てきませんようにと願いながら洞窟に入っていた。中に入るほど空気が冷え、いっそう恐怖感が増す。ここは、かつて人骨が見つかり土器や骨角器などの遺物が発見された。今でも人骨があるような気がして非常に恐ろしかった。



■カフェウさぎの入り口で飯島さん(左)と記念写真。

て来られた方で、娘さんが琵琶湖の周りに生えている「よし」で作った「よし笛」の奏者だそう。今度は娘さんの優しいよし笛の音色を聴くことができるという。

お腹がいっぱいになった私たちは取材再開、鱈淵小学校猪目分校まで引き返すことにした。この学校は現在閉鎖中なので、残念ながら誰にも会うことができなかった。小さな、かわいらしい木造校舎だった。

あゝの世への入り口

最後に鋤山跡を見に行った。道路脇の看板に「鷲銅山」の文字が見えたが、車を降りて草むらの中に入ってみても、それらしきものはなかなか見つからない。ここであきらめるわけにはいかないと懸命に探していると、ついに山の斜面を少し上がったところに坑道の入り口らしきものを発見した。近づく入り口から冷たい空気が流れている。日の光がさしているところでは水蒸気が白く見える。それくらい坑道の中と外気の温度差が大きいのだろう。空気の冷たさはまるで冷蔵

たので入って見たかったが残念だ。

自然の冷蔵庫

最後に鋤山跡を見に行った。道路脇の看板に「鷲銅山」の文字が見えたが、車を降りて草むらの中に入ってみても、それらしきものはなかなか見つからない。ここであきらめるわけにはいかないと懸命に探していると、ついに山の斜面を少し上がったところに坑道の入り口らしきものを発見した。近づく入り口から冷たい空気が流れている。日の光がさしているところでは水蒸気が白く見える。それくらい坑道の中と外気の温度差が大きいのだろう。空気の冷たさはまるで冷蔵

庫のようだった。

旅の終着点

いよいよ旅は終わりを迎える。鷲銅山跡から出雲大社へと向かう。山を下りて行くことやがて出雲大社の裏に出る。最後に出雲大社のしめ縄の前で記念撮影。朝九時に出発し、帰ってきたのは夕方六時という本当に長い旅だった。たくさんの方に会い、皆さんの経験をした。快く取材を受けてくれた人たちに本当に感謝したい。皆さんも島根半島の旅に出かけてみてはどうだろう。きつと新しい発見や出会いが待っているはずだ。(おおにし・あおい/日本語文化系一年生)



■(上段右) 鷲銅山坑道入り口。冷気の冷たさが恐ろしくもあった。(上段左) 鷲銅山の案内板。(下段) 旅の終着点の出雲大社。